

性器ヘルペスウイルス感染症の発生動向、2024年

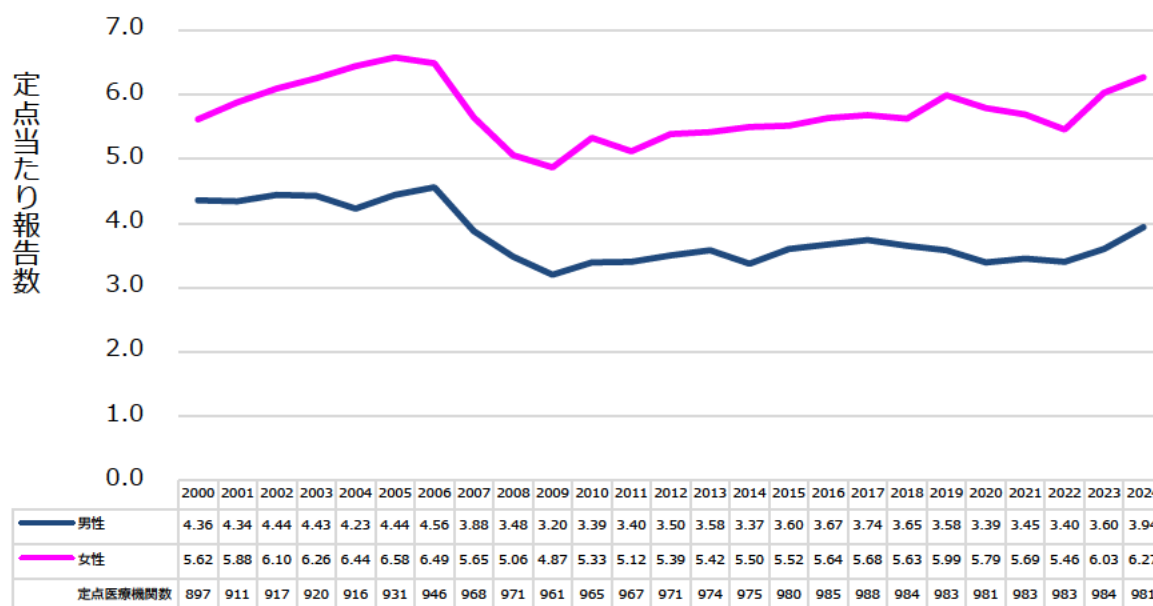
国立健康危機管理研究機構
国立感染症研究所 応用疫学研究センター
同 感染症サーベイランス研究部
同 実地疫学専門家養成コース (FETP)

2025年11月15日現在
(掲載日: 2026年4月28日)

性器ヘルペスウイルス感染症は、単純ヘルペスウイルスの感染によって性器やその周辺に水疱や潰瘍等の病変が形成される疾患である。性器ヘルペスウイルス感染症は感染症法の5類定点把握対象疾患で、都道府県が指定した性感染症定点医療機関から感染症発生動向調査に報告されており、性感染症定点医療機関数は2007年以降1000弱でほぼ横ばいである。性感染症定点医療機関では医師が「症状や所見から性器ヘルペスウイルス感染症が疑われ、かつ、届出のために必要な臨床症状（性器や臀部にヘルペス特有な有痛性の1から多数の小さい水疱性又は浅い潰瘍性病変）により、性器ヘルペスウイルス感染症患者と診断した」症例について、医療機関の管理者が月単位で届け出ている。

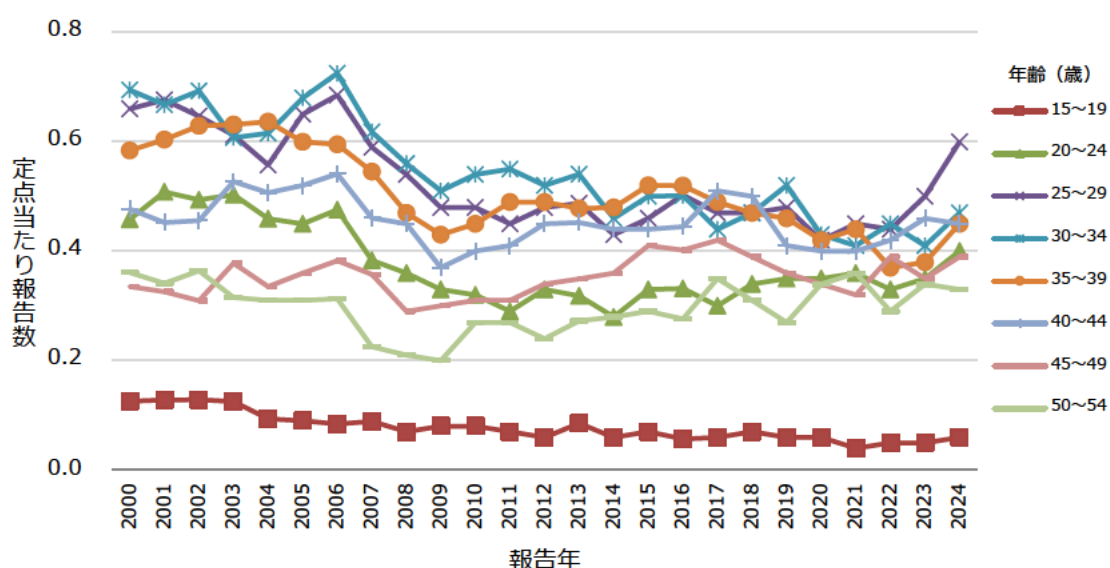
感染症発生動向調査における性器ヘルペスウイルス感染症の定点当たり報告数は、男性では2006年をピークに減少した後、2013年以降増減を繰り返しながらも漸増していた。同様に、女性では2005年をピークに減少した後、2010年以降増減を繰り返しながらも漸増していた。(図1)。2006年以降の報告数には、2006年4月に行われた「明らかな再発は除く」という届出基準の変更が影響している可能性がある。

図1 感染症発生動向調査における性器ヘルペスウイルス感染症定点当たり報告数、2000～2024年



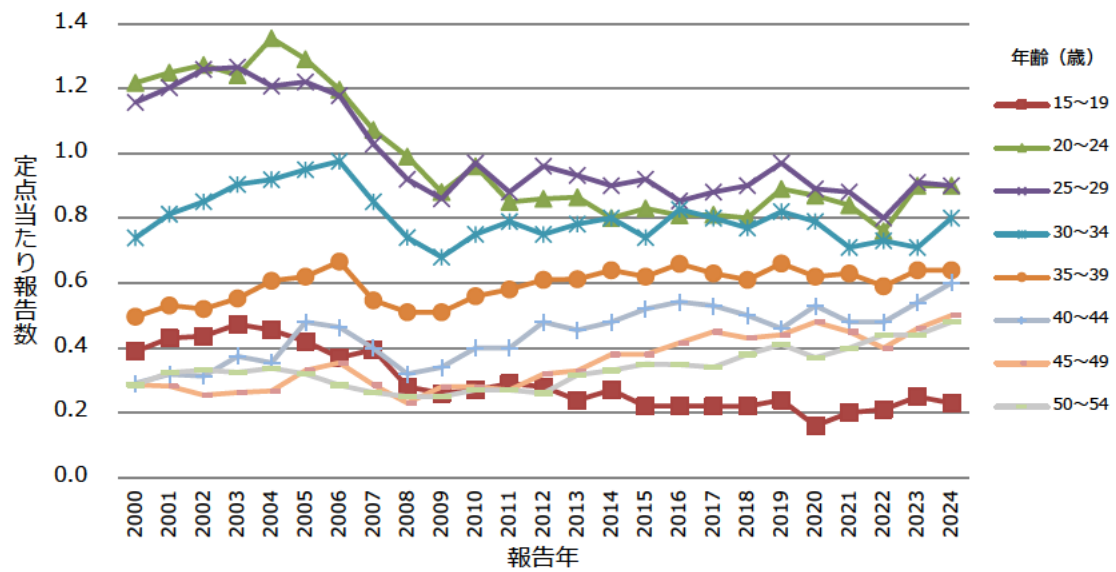
5歳毎の年齢階級別定点当たり報告数は、男性では20代から40代が多かった。20代から30代では、2006年をピークに2009年にかけて減少し、その後は横ばいで推移していたが、2023年から2024年にかけて、いずれも増加に転じた。特に、20代後半では、2024年報告数に顕著な増加がみられた。また、40代前半から50代前半では、2009年以降、増減を繰り返しながら微増していた（図2）。

図2 男性の年齢階級別性器ヘルペスウイルス感染症定点当たり報告数、15～54歳、2000～2024年



女性の年齢階級別定点当たり報告数は、いずれの年においても20代が他の年齢階級を上回っていた。10代から20代は2004年をピークに、増減を繰り返しながら減少し、2010年代以降、ほぼ横ばいで推移していた。30代は2006年に報告数が最多となり、2009年まで減少した後、横ばいで推移していた。また、40代は2008年以降、50代は2012年以降にそれぞれ漸増しており、いずれも2024年が過去最多となった（図3）。

図3 女性の年齢階級別性器ヘルペスウイルス感染症定点当たり報告数、15～54歳、2000～2024年



性器ヘルペスウイルス感染症は、一度感染すると体内に潜伏し、再活性化して症状が出現する。感染症発生動向調査では、初感染が届出対象だが、初感染と再活性化による症状は時に区別が難しい。他の性感染症では若年者の報告数が多いが、性器ヘルペスウイルス感染症では比較的高齢者が多いことは、再活性化の症例が報告されている可能性があり、発生動向は慎重に解釈する必要がある。